

インターネット上の仮想世界「セカンドライフ」で、社会福祉や環境のための様々な募金活動が行われるようになった。これまで寄付に関心がなかった人も気軽に寄付でき、支援者のすそ野が広がると期待される。

セカンドライフとは、米国のインターネット企業が運営するオンラインサービス。参加者はアバターという分身で仮想の街を歩く。クレジットカードを使って、仮想通貨「リンデンドル」を入手すれば、アバターの服やネット上の土地などの買い物ができる。

「赤い羽根共同募金」を行う社会福祉法人中央共同募金会（東京）は今年10月から、この仮想空間内で募金活動を始めた。現実世界と同じように今月末まで寄付を受け付けている。寄付されたリンデンドルは、現実の日本円に交換され、社会福祉活動などに充てられる。赤い羽根は、アバターにつけられる。

赤い羽根共同募金の募金総額はピーク時（1995年度）の266億円から、

仮想世界で気軽に募金



セカンドライフでは、アイドルの分身が共同募金をPRしている（中央共同募金会提供）

深夜でも分身活動

昨年度は2億7千万円に減った。生活スタイルが変わり、深夜でも気軽に寄付できる仕組みは有望だという。セカンドライフを舞台にした募金活動は、日本ユニセフ協会、日本ウミガメ協議会なども行っている。社会貢献活動の一環として各団体のプース管理などを代行している「インターリンク」社（東京）では「各団体の活動が幅広く知られるようになり、新たな寄付につながるのではないかと話す。